別紙様式３

上越教育大学研究プロジェクト　終了報告書（特別研究・一般研究）

研究代表者　所属・職名　附属幼稚園・園長
氏　　名　　内藤　美加
研究期間　令和２年度 ～ 令和３年度

研究プロジェクトの名称	子どもを支える保育 ―評価を通して―
研究プロジェクトの概要	本園では、令和元年度から、「子どもを支える保育―評価を通して―」として、子どものより豊かな育ちのために、日々行っている保育を評価する方法を探る研究に取り組んできた。保育記録に記す内容や方法を見直すとともに、カンファレンスをもとに保育を振り返る機会を日常的に位置付けて保育を評価するしくみを整えた。このしくみにより、職員全員が、「子どもの育ち」を最優先して保育に取り組み、自分自身が行った保育を率直に振り返りながら、さらに改善していこうとするサイクルを生み出すことになった。 本研究では、評価のしくみをもとに「こんなふうに育ってほしい」と考える姿に照らして、教師が行った援助や環境構成などが幼児の育ちや学びを支えるものになっていたか、またはそのための改善になっていたのかを判断する考え方、すなわち保育の評価観といえるものを探る。また、保育を進めながら、これまでに整えてきた評価のしくみや前年度整理された評価の考え方に沿って、自分たちの保育を評価し、その妥当性について検証したいと考え、２年間の研究に取り組んだ。
研究成果の概要 ※申請時にチェックした「取組課題」との関連とその成果も明記すること。	研究１年目（令和２年度）は、カンファレンスとエピソード事例の２つの検討から見えてきた考え方を比較・検討し、７つの評価観として言語化した。保育を行っていく中で目指しているものや大切にしている幼児の姿、保育の心もちなどを保育者全員で自覚することができた。 研究２年目（令和３年度）は、保育を進めながら、これまで整えてきた評価のしくみや前年度整理された評価の考え方に沿って、保育を評価し、その妥当性について検証した。改めて評価観を捉えなおしたことで、より考え方が精査され、８つ目の評価観を導き出すことができた。また、他園との交流を行ったことで、自分たちの保育を語り合うことに対して共感を得るとともに、質の高い保育につながる評価のしくみの在り方について議論することができた。
研究成果の発表状況	・１年目の成果については、令和２年 10 月１日に本園において第 28 回幼児教育研究会を開催し、上述の成果を発表した。また、令和３年３月に研究冊子を発行した。 ・２年目の成果については、令和３年 10 月１日に本園において第 29 回幼児教育研究会を開催し、上述の成果を発表した。また、令和４年３月に研究冊子を発行した。
学校現場や授業への研究成果の還元について	県立教育センター主催の幼稚園等新規採用教員研修、本学の幼児教育セミナー、実地指導等において、講師または指導者として本園職員が参加し研究の成果を伝えた。また、上越市や妙高市、糸魚川市、津南町から研修会の講師や保育参観の依頼があり、研究の一端を還元した。

【提出期限】令和４年３月３１日（木）：厳守